

---

パルマ、サン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ聖堂のコレッジョによる天井画

— 図像の生成と解釈に関する一考察 —

---

アントニオ・アレグリ・ダ・コレッジョ(1489-1534)は1520-21年にかけて、ベネディクト会の改革派、カッシーノ修道会付属のパルマのサン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ聖堂交差部のドームに天井画を制作した。従来、本作品の主題は、『ヨハネ黙示録』の「キリストの再臨」、あるいは『黄金伝説』の伝える「ヨハネの昇天」と大きく二つの方向で解釈されてきた。エクサージャン(Ekserdjian, 1997)は、これらを組み合わせた複合的な図像である可能性を示唆しただけで、それ以上の考察は行っていない。

本発表では、神学的解釈や典礼に根拠を求めつつ、これまで別個に提案されてきた「再臨」と「ヨハネの昇天」という二つの主題の密接な関係を検討する。先行研究では着目されなかった観点から以下①～⑤を明かにし、画家が内容的に緊密に結びつくこれらの主題を重ね、聖堂の建築形態を利用して、一つのイメージとして提示していることを示す。それは、観想を通じて神秘的合一を追求したカッシーノ会の修道士たちの理想に適う表象であったと考えられる。

①『ヨハネ福音書(21:20-22)』には、キリストがヨハネの運命について、「私の来る時まで彼が生き残っていることを、私が望んだとしても」と語る場面がある。これに関して、「私の来る時」をキリストの再臨と理解し、ヨハネの死を最後の審判や終末と結びつけるアウグスティヌスらの解釈に従い、二つの主題の関連性を示す。

②カッシーノ会修道院で使用された聖務日課書(1506)から、本作品の図像が福音書記者聖ヨハネの祝日の典礼に基づくもので、そこで朗唱された式文が①の解釈と関係が深いことを明かにする。

③先行研究で取り上げられていないジョヴァンニ・ダル・ポンテの《ヨハネの昇天》(1420-24、ロンドン、ナショナルギャラリー)に関して、本作品との図像上の類似性を指摘し、この主題が終末論的図像として扱われていることを確認する。

④1520年代後半の祭壇画制作におけるコレッジョの芸術展開と関係づけながら、本作品では「ヨハネの昇天」をもう一つの主題である「再臨」と結ぶために、構図、人物、身振りや視線、雲などの造形言語が構成され、さらに、観察点に応じて現れ/隠れる位置にヨハネを置くことで、キリストと使徒たちが、外陣から眺める場合にはドーム装飾の図像的伝統に従った「再臨」の構成を取ると同時に、内陣では「ヨハネの昇天」を展開する要素へと転じていることを明かにする。

⑤二つの主題を統合しヨハネをキリストと対面させるという創意は、ベネディクト会内部の改革運動から生じたカッシーノ会の信仰に沿うものであり、画家自身世俗の修道士としてこの修道会と深い繋がりを持っていたからこそ、着想し実現し得たことを提示し、同時期のコレッジョの創作活動に本作品を位置づける。